

「近世語と近世文学」

中村 通夫

吉田澄氏夫がこのたび「近世語と近世文学」を公刊された。氏は人も知ることく、

ながく文部省の国語調査会にあって国語改革の事業にたずさわり、また「天草版金句集」などの研究ですぐれた業績を挙げられた人である。そしてまた、江戸語の研究者としても忘れることのできない人である。

氏は「大学時代には、主として近世文学書の類を読みあさり、将来は近世文学の研究に従事しようと心がけて」おられたが「卒業後、文部省の臨時国語調査会に勤務する」ようになってから語学に興味を持ちはじめ、「近世文学についての関心はいつしか近世文学を資料とする近世語の研究に移って」行かれたようである。(後書)。このような多彩な学的経歴が後に触れる氏の持ち味を示すことにもなるのであるが、こゝにいま公刊されたこの「近世語と近世文学」も

多分にこのような性格を帯びている。

本書は全体を三部に分け、第一部は書名と同じく「近世語と近世文学」、第二部を「国語の方言」第三部「国語国字問題」として、昭和三年から二十六年の末に至るまでに発表された四十数篇からなる論文を収録している。年次別に見ると主に昭和初年代は方言関係の論文が多く、昭和十年代、特にその前後には近世語に関した論文があり、国語国字問題に関するものはその全期間にわたっている。氏自ら「はしがき」で述べているごとく、それらの論文集はいずれもその二十三年の間に講座・雑誌・新聞などさまざまな機会に発表したものであるため、論述の態度も自ら異なり、研究的なもの啓蒙的なもの、内容の重複したものも入りまじって収録されている。内容の編成からみれば、1 紀行文風のもの「雲巖寺紀

行」「天草学林の跡」など) 2 隨筆風のもの(「良寛雜記」「薄命の文人尾野露葉」など)

3 書評(「湯沢幸吉郎氏「徳川時代言語の研究」など) 4 近世文学の研究(「八文字屋本の研究」「浮世草子に現れたる曾我伝説」など) 5 啓蒙的なもの(「明治の国語」「婦人の言葉」「標準語の歴史」「国語国字問題関係のものなど) 6 近世語の研究(「江戸語の時代区分」「難波鉦用語考」「句雙紙抄について」など)となり、このうち5、6がもっとも多く収められている。こゝでは本誌の性格の上から1)5)の類のものは一応除き、6)の中で多くの部分を占めている江戸語に関する論文について紹介の筆をすすめ、吉田氏の江戸語研究における業績の一端について触れてみることにする。

本書の中で江戸語研究について注目すべき論文は四つある。それは(1)「江戸方言より東京語へ」(2)「江戸語の時代区分」(3)「江戸語に関する一疑問」(4)「言語からみた上方文学と江戸文学」がそれである。

(1)の「江戸方言より東京語へ」と(2)の「江戸語の時代区分」はともに江戸語の形成発展の姿を史的にとらえて江戸語の時代的

区分を試みたものである。(1)においてはそれを関西文化の影響の大きかった天正開府から元禄までと、江戸独自の文化を築き上げた元禄以後幕末までと、主に文化的な面から江戸語を二分して眺めたものである。それに対してその発展である(2)の論文では、それを更に細分して天正開府から明暦頃までの資料の乏しい時代約七十年を第一期、狂言本、咄本、六方詞などから察しられる上方言葉と関東方言とが張り合っていた寛文頃より享保までの約九十年間を第二期とし、この第一・二期を前期江戸語(未完成時代)と名づけ、後期江戸語と區別する。後期江戸語は江戸語完成期であって洒落本の会話体の文章に江戸語の完成した姿を知ることのできる宝暦頃から寛政までの約五十年を第三期、第四期を滑稽本・人情本からうかがえる文化頃より幕末までの約六十年とした。こゝでは(1)に比して一層詳しい資料が挙げられ、それぞれの期の目立つ特徴がとらえられてはいるが今日からみればいさゝか大まかの感がなくもない。しかし、上方言葉には手がつけられていても、江戸語はだれもまだ身を入れて研

究しようとしてなかった時代にまず江戸語の性格を解明しようとする試みであったことを考えればそのような物足りなさは消失するであろう。むしろこのような未開拓の時代に、数多くの資料を駆使整理して、その内容を紹介した労苦と、各期の大きな江戸語の特徴をとらえて時代区分を試みられた見解の新鮮さとは長く江戸語研究者の忘れ得ないところである。たとえその後の諸氏の研究によって多少の修正が試みられたにせよ、その大綱は今日においても大きな改変を要しないことを思えば、その感ばさりに深い。因にこの(2)についてはその発表の前年の昭和九年にこれよりさらに詳細な講演発表が東京方言学会で行なわれたことを附記しておく。

(3)の「江戸語に関する一疑問」は(1)の「江戸語より東京方言へ」と同じ昭和九年に発表された。これは否定過去を表現する場合、東部方言では「ナカッター」を用い、西部方言では「ナンダ」を用いるが、この関係は人が考えるほどに古いものではなく江戸では専ら「ナンダ」を用いて「ナカッター」を用いていないことに疑問をいだいて

の論文である。氏はこゝで「ナンダ」に混じて「ナカッター」が江戸で多少なりとも用いられたのは幕末の天保ころからと調査され、江戸の「ナンダ」は東部方言の中では例外的なもので、それは江戸文化の特質の上に発達したものと結論している。この論文の結論については、その後多少の疑義もあらわれ、また関係論文もあらわれるなど、後進を刺激するところが大きかったと同時に、それ自身として江戸語研究における初期の実証的な研究として注目すべきものであった。

(4)の「言語よりみた上方文学と江戸文学」は終戦後に発表されたものである。(1)(2)(3)の発表と(4)との間にはかなりの時期が流れてはいるが、氏はその間、それらの研究と平行して、江戸語から東京語へという観点から東京語の解明に筆を進められている。江戸語が東京語形成の基礎であり、江戸語の性格が多分に東京語に継承されているという考えのもとに「東京語の特色」「明治の国語」「東京方言」が発表された。この「言語よりみた上方文学と江戸文学」はいわばそういった経緯を経て来た氏の江

戸・東京語に関する研究の集成ともいふべきものである。こゝでは、使用できる資料にはどのようなものがあるかという資料の紹介が始まり、これからの近世語の研究について階級的立場から考察すべき必要を唱え、そのあとで、近世語の音韻・語彙・語法の中でそれぞれ特徴あるものはいくつか挙げておられる。そして、近世語の研究は「今日なお骨組の時期であつて、眞の研究は将来に期待すべきである。研究資料の発見、吟味、語学的整理などはまだ決して十分には行われていない」ことを繰返し繰返し述べ、現在なお基礎作業時代であることを改めて強調されている。吉田氏の江戸語に關する功績はそれを一言でいうとすれば、こうした確信のもとに江戸語に關する基礎的研究に終始して來られた点にあるといえるであらう。吉田氏がそれらの論文を次々と発表された時代は古典語の研究に急であつて、近代語については研究というにふさわしいものはなく特に江戸語については殆ど手が付けられていなかった時代であつた。吉沢義則博士の国語史概説(昭和六年)などの中での近世語についての叙述が見ら

れ、また各大学における卒業論文の題目にそれがちらほらと見られてはいたが、前者はあくまでも国語の沿革の主要をつなぐ意味あいのものであつたし、後者はまだ印刷には附せられてはいなかつた時代であつたのである。それに近代語の研究史上、吉田氏とともにかくことのできない佐藤鶴吉氏、湯沢幸吉郎氏の著作も未だこの時代には出現してはなかつた。このような時代にいはやくこゝに挙げたようないくつかの江戸語に關する論文を発表された吉田氏の労苦は想像するにあまりあらう。従つてそれらの論文のいずれもが先に挙げたごとく多くの資料を展示し、その内容を紹介することに力点を置き、江戸語の大きな特徴だけを指示する江戸語の展望に終わったことはまたやむをえない時代的背景が存在していたためなのである。

しかして、このようなパイオニアとしての労苦には氏の広い學問的な領域——特に江戸文学に対する見識が十二分に役立っていることは見逃さまい。全く未知数の江戸語の数限りない資料群の中から必要かつ適切な資料を発見し、選択する困難さは、吉

田氏のごとき人であつてはじめて成しとげられたのである。それらがそれ以後の研究に大きな手引となつてゐることはいうまでもなからう。その意味でそれらは江戸語の研究史上輝かしい一里塚を打ちたてたものであつた。この開拓者としての活字にあらわされない労苦と精進に対して我々は深く敬意を表さなくてはなるまい。

なお、氏は「江戸語の発音」のあとに、江戸語が、現在の東京周辺の各地方の方言に照し合せて見るとき、他のどの地方の方言よりも埼玉県(武蔵国)の方言の特徴と一致することが多いことを附記されている。本書の第二部国語の方言が郷里新潟県の方言と居住地東京の方言と曾遊の地伊豆湯ヶ島方言とについての觀察を含んでいることを知るとき、さらに勤務地埼玉県方言の記述が加えられ、第一部の研究と第二部の研究とが江戸語と埼玉方言とにおいて融合して、両者の対比が明らかにされ、やがて第三部国語国字問題への一つの有力な資料として、われわれに示される目を期待しつつ筆をおくこととする。